

## 中世思想としての「心澄む」

石黒 吉次郎

### 一 「心澄む」思想の発生——「心澄む」と仏道

先に私は「心澄む舞」という短い文章を発表させていただいたのであるが、これが短いものであったために、改めて中世思想史の立場からこの問題を考察することにする。

「心澄む」「心澄ます」は中世の文学によく見られる表現である。その魁として、『古今和歌集』夏歌に見える僧正遍昭の歌「蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」を考える。この一首は蓮の葉がそこに宿る露を玉と見せるといふ小さく透明で繊細な美の世界を描いているが、この蓮には浄土の仏のイメージがあり、泥池に生える蓮ながら、それに座す仏に濁りの心のないことをも暗に意味していると思われる。

仏道に心澄ますことは、『源氏物語』にいく例か見えている。帚木巻にある雨夜の品定めの中で、左馬の頭の論に、  
 「心深しや」などほめたてられて、あはれ進みぬればやがて尼になりぬかし。思ひ立つほどはいと心澄めるやうにて、世にかへり見すべくも思へらず、

とあるのは、女性が気持ちが高ぶって出家し、尼となった当座はたいへん悟ったような心境になることを述べたもので、仏道に入ること、雑念を払うことができ、心澄むことであった。鈴虫巻には、女三宮が出家し、「へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむ」と歌を詠む。これは源氏の「はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき」と詠んだ歌に応じたもので、あなたが来世に蓮葉に二人で座すことを約束したとしても、

あなたの心は澄むはずもなく、そこへ住みはしないでしよう、という意味で、極楽への往生はやはり心の澄むことであつた。この極楽の蓮葉の和歌には「住む」と「澄む」が掛けられ、遍昭の歌を思わせる。夕霧巻で、

「…世のうきにつけて厭ふはなかなか人わろきわざなり。心と思ひとる方ありて、いますこし思ひしづめ心澄ましてこそともかうも」とたびたび聞こえたまうけり。

とあるのは、朱雀院が落葉の宮に対して出家について意見を述べべくだりで、世の中が嫌になつたからといって出家するのは外聞が悪い。自分で決心するところがあつて、より落ち着いて、冷静になつてからなら出家してもよいという考えで、心澄ますこと自体が仏道に通うことであつた。幻巻に、

「独り住みは、ことに變ることなけれど、あやしうさうざうしくこそありけれ。深き山住みせんにも、かくて身を馴らはしたらむは、こよなう心澄みぬべきわざなりけり」などのたまひて、

は、晩年を迎えた源氏が、出家して山寺に住むために、このように身をならしておく、心澄むことになる、語るものである。「澄む」には「住む」を掛ける文学伝統があるので、「山住み」から「心澄む」が連想されたように思われる。これに続いて、

心には、ただ空をながめたまふ御気色の、尺きせず心苦しければ、かくのみ思し紛れずは、御行ひにも心澄ましたまはんこと難くやと見たてまつりたまふ。

とある。源氏はかくも物思いにふけるのであれば、仏道の勤めをして心を澄ますことは難しいだろうと我が身思うのである。仏道に専心することは、「心を澄ます」境地に入るためでもある。宇治十帖に入つて橋姫巻では、

八の宮の、いとかしこく、内教の御才悟深くものしたまひけるかな。…心深く思ひすましたまへるほど、まことの聖の掟になん見えたまふ。

は、宇治に住む阿闍梨が出家の望みを持つ八の宮を見て述べる感想である。八の宮はすでに心を澄まして仏道に向かっていたのであった。「あとたえて心すむとはなけれども世をうち山に宿をこそかれ」はその後に見える八の宮の歌であるが、これも「心澄む」に「住む」の意味が籠められており、この場合は『古今和歌集』の喜撰法師の歌「わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうち山と人はいふなり」が踏まえられている。以上の「心澄む」はすべて仏道と関係する。

## 二 「心澄む」と和歌・歌謡

さて「心澄む」心境を重んじたのは歌論の世界であった。和歌を詠むことにおいて「心澄む」が重視された理由として、錦仁氏は和歌の詠吟の心澄む声に神仏が感応することを強調されている。<sup>(3)</sup> 氏のあげた例も参照して以下検討する。『西行上人談抄』に、

大かた、歌は数寄の源なり。心のすきて、詠むべきなり。しかも太神宮の神主は、心清くすきて和歌をこのむべきなり。大神喜ばせたまふべし。住吉の大明神も、それをいよく感じたまふべきなり。<sup>(4)</sup>

とあるのは、和歌を法楽として考えた場合を述べているのである。和歌は数寄（風雅）の源であって、さらに「心清く」歌を詠めば、伊勢大神宮の喜ぶところとなる。心清いことは、数寄の精神にも通じることである。また一心に和歌を詠むことがすなわち清いことにつながることになると思われる。逆によい歌は、心を澄ますことによつて生まれるものであった。『毎月抄』に、

さて、この十体の中に、いづれも有心体に過ぎて歌の本意と存ずる姿は侍らず。…よくよく心を澄まして、その一境に入りふしてこそ稀によまる事は侍れ。…詩は心を気高く澄ますものにて候。…歌にはまづ心をよく

澄ますは一つの習ひにて侍るなり。<sup>⑤</sup>

とある。有心体の歌はもつとも優れた歌の姿で、それはよくよく心を澄まし、ひとつの境地に達すればまれに詠むことができる最高の歌である。また詩を詠むと心が気高く澄む。歌を詠む際に心を澄ますのは、作歌の一つのならわしであるとする。こうして『毎月抄』においては、心澄ますことは歌道上、重要な事柄とされる。この書が藤原定家の作か否かは不明であるとされるが、定家の『京極中納言相語』には、「紫式部の筆を見れば、心も澄みて、歌の姿・言葉も優に詠まるゝなり」（中世の文学・三弥井書店）とあり、『源氏物語』を読むと心が澄み、優雅な歌を詠むことができるともある。

歌を詠む際には心を澄ますべきだという考えは、阿仏尼の『夜の鶴』にも見える。

まづ、歌を詠まん人は、事に触れて情を先として、物の哀れを知り、常に心を澄まして、花の散り、木の葉の落るをも、露・時雨色変る折節をも、目にも心にもとどめて、歌の風情を、立居につけて心をかくべきにてぞ候ふらん。<sup>⑥</sup>

とある。歌を詠むために心を澄ますのは、それによって自然の状況や変化を見据え、その上で作歌するためであるようである。その前の箇所では、

歌のしるべは、『万葉』『古今』もなほあととどまりけり。発心、修行にも進む人あらば、五の濁りの世の末なりとも、などか無常菩提をも得ざらん。道心ある人とすきたる人との心にぞよるべき。

とあって、歌道と仏道とが並行して語られ、法命を継ぐことと歌の道を栄えさせることの二つの課題が説かれている。また反対に和歌によって心が澄まされるといふ考えもある。『色葉和難集』序に、

和歌にいたりては、心をすますなかなだちなれば、悪念さほふ事なく、情をしらすことわざなれば、放逸をさ

まりてをかす事なし。<sup>(7)</sup>

とあって、和歌は人の心を澄ますもので、悪念のある歌はなく、情を人々に知らせるもので、我儘がおさまるとして  
いる。

ところで歌論の中には、これまでと異なった「心澄む」もある。鴨長明の『無名抄』十七・井手の山吹並びに蛙に、ある人が山城の井手の里に出かけ、所の者に井手川の蛙（河鹿蛙）は常に水に澄んで、夜更けの鳴き声は、たいそ心が澄むもので、ものあわれな声であると告げられる。これは動物の鳴き声に心澄むものを感じている例である。時代が下って室町時代初期の花山院長親（耕雲）の『耕雲口伝』の序文にはこうある。

この十とせあまり、白河の東、花頂山のおくに、幻質をかくし、（鹿豕に友をむすび、）泉石に心をすまして、あかしくらすほどに、…

唯寢食をわすれ、万事を忘却して、朝夕の風のこゑに心をすまし、雲の色にながめをこらして、ちりの（まの）あだごとに心みだらず、…その折ふしみゆる空のけしき、雲のたゞずまひ、その時に聞きし風の声、羽のおとなどの、ふと心にうかびてふしぎなる風情、あたらしき心ねなどのよみいださるゝなり。<sup>(8)</sup>

山奥において泉石に心を澄ます日々を送っていることを述べた後、自然の風物に心を澄まし、それによって歌を作る  
ことができるとしており、これは『夜の鶴』の考えに近い。「心澄む」は耕雲の生き方、生活にも関係する。ここではさらに和歌の数奇にも言及している。

聴覚のみならず、視覚的にも自然の風物によって心が澄むという考えは、『梁塵秘抄』にも見える。

心の澄むものは、秋は山田の庵ごとに、鹿驚かすてふ引板ひいたの声、衣ひたして打つ槌つちの声（三三三）<sup>(9)</sup>

は秋の静かな山田において、引板の鳴る音や衣を打つ音が響き渡るのを聞くと、心が澄むと云っているものであり、

これは古代人の共通の感覚だったのであろう。後者の例は、能「砧」の世界に通うものである。これは物尽しの形式で、聴覚による「心澄む」の歌謡であるが、次の、

心の澄むものは 霞花園夜半の月 秋の野辺 上下も分かぬは恋の路 岩間を漏り来る滝の水 (三三三)

は、霞、花園、夜半の月、秋の野辺といったものに対して視覚的に心澄むものを覚えるとし、さらに自分を越えた恋心も心澄むのだとする。そして激しい恋心は岩間に湧きかえる水の流れによく喩えられるが、岩間を漏れて流れる水にも心が澄むのだと、視覚的にも聴覚的にも感じとっている。秋の野辺の鹿の鳴き声から「恋の路」が導かれるのであろう。かように見ると、古代人は心澄むことを求めており、それは仏道や和歌とは異なる別の面での欲求ということになる。芸能者がそうした古代人の心を察して、これらを歌っていたものとも思われる。これは日本人のむしろ汚れを嫌う神道的な心情を表わしている可能性もある。次の「心澄む」はかなりユニークである。

見るに心の澄むものは、社やしろ毀れて禰宜なほもなく 祝はふりなき 野中の堂のまた破れたる 子産まぬ式部の老の果て

(二九七)

これは衰えに向かっている事物・人物に対して視覚的に心澄むものを感じている例で、無常のさまを見ることよって道理を感じ、心澄むとしていたのであろう。中世的な雰囲気の歌謡である。子産まぬ式部とは、新編日本古典文学全集本（小学館）の同箇所の頭注では、紫式部や和泉式部というより、女官一般をさすかとしている。宮仕えに明け暮れ、子供も産まないまま老後を迎える人達の姿を歌っているとも思われるし、また小野小町の落魄譚などの連想もあるであろう。なお五一二番歌謡には、「稻荷には禰宜も祝もかみめ神主かみめもなきやらん 社毀れて神さびにけり」とあり、稻荷の社にはもはやこれに仕える神官もなく、社殿は壊れているが、かえって神々しいとしている歌謡があつて参考になる。人里離れた稻荷社であろうか。これも中世的な趣がある。

ところで後白河院の『梁塵秘抄口伝集』にも「心澄む」の例がある。院が応保二年（一一六二）に再度の熊野参詣をした際のことである。

夜中ばかり過ぎぬらんかしとおほえしに、宝殿の方を見やれば、わづかの火の光に、御正体の鏡、所々輝きて見ゆ。あはれに心澄みて、涙もとどまらず。…万の仏の願よりも、千手の誓ひぞ頼もしき、…押し返し押し返し、たびたびうたふ。資賢・通家、付けてうたふ。心澄ましてありし故にや、つねよりもめでたくおもしろかりき。夜中の社殿は物静かで神々しく、おのずから心が澄み渡り、落涙するほどであった。周囲の状況がそうさせた例である。またその雰囲気に合わせて、心を澄まして今様を神前で歌ったので、いつもよりも感興を催した、というのである。芸能の場では、和歌を詠む場合とは異なった「心澄ます」状態があるようである。

### 三 「心澄む」と軍記物語・説話集

芸能と「心澄む」の関係では、『平家物語』の例が想起される。覚一本の巻五・月見では、徳大寺実定が新都福原より旧都の京都に戻って来て、近衛河原院に住む妹の大宮藤原多子を尋ね、月見をする。

源氏の宇治の巻には、優婆塞の宮の御むすめ、秋のなごりををしみ、琵琶をしらべて夜もすがら、心をすまし給ひしに、在明の月の出でけるを、猶たへずやおほしけん、撥にてまねき給ひけんも、いまこそ思ひ知られられ。

と、『源氏物語』で宇治の八の宮の姫君が琵琶を弾いて心を澄ましたことを引き合いに出す。ここでは管絃と心澄ます行為が一体のものと考えられている。橋姫巻の原文では、薫が姫君達を垣間見るのであるが、

内なる人、一人は柱にすこし隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝあたるに、雲隠れたりつ

る月にはかにいと明るさし出でたれば、「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげにほひやかなるべし。

とあつて、琵琶を弾じることを心澄ます行為としてゐるわけではない。管絃に「心澄ます」を見出すのは、中世人らしい考えということになるであろう。ちなみに延慶本・第二中・実定卿待宵ノ小侍従二合事にも、覚一本の右のくだりは同文的に見える。

同じく『平家物語』では、巻八・太宰府落に、平重盛の三男清経が豊後国柳が浦において平家の運命に絶望し、入水する場面が語られる。

月の夜、心をすまし、舟の屋形に立ち出でて、横笛ねとり朗詠してあそばれけるが、閑に経読み念仏して、海にぞしづみ給ひける。

月の明るい夜に清経は横笛で音程を定めて朗詠をするのであるが、状況が心澄むものであり、その上で心を澄まして歌つたのであり、先の『梁塵秘抄口伝集』の後白河院の今様と類似の場面であつて、環境・歌謡・心澄むが一体となるという思想である。『平家物語』はもともと管絃歌謡の話を好んで入れる傾向にある。巻六・祇園女御には、大納言藤原邦綱のことが見える。近衛院の石清水八幡宮行幸の際に、人丁が泥酔して装束を水に濡らし、神樂ができなくなつてしまった。ところが邦綱が神樂の装束を準備して、これで神樂を奏することができた。

程こそすこしおし移りたりけれども、歌のこゑもすみのぼり、舞の袖、拍子にあうておもしろかりけり。

これも神前で歌われた神樂歌が折から場所柄澄み渡つたというもので、こうした場面が中世人の好みであつたのであろう。巻七・竹生島詣では、木曾義仲討伐のために、平家軍は北国に向かうが、その中にいた平経正は詩歌管絃に長じた人物で、琵琶湖の竹生島の弁財天に参詣し、琵琶の秘曲上玄・石上を弾いた。その音は宮の内も澄み渡り、明



神が感に耐えず、奇瑞を表わしたとしている。管絃は逆に環境を浄化するものとしても認識されていた。下つて御伽草子「木幡狐」（洪川版）では、三位の中将は昔の光源氏さながらの人物で、常に詩歌管絃にのみ心をすましていたとする。詩歌管絃は仏道と同様、濁りない心を保つ方法であるとするに至っているのである。

ところで説話集における「心澄ます」は種々の相を示している。鴨長明の『発心集』巻六・六話・侍従大納言幼少の時、験者の改請を止むる事には、蹴鞠の名手藤原成通について、

すべて、いみじき数奇人にて、世の濁りに心をそめず、妹背の間に愛執浅き人なれば、後世も罪浅くこそ見え  
けれ。

と評している。成通は風雅の道を重んじ、世俗のことにわずらわされず、夫婦の間柄にも束縛されない人であったので、罪の少ない人生を送り、来世も頼もしいというのである。ここでは数奇が心澄むことに通じ、したがって仏道にかなうものであることが説かれる。このテーマは次の巻六・七話・永秀法師、数奇の事にも述べられている。八幡の別当頼清の遠縁にあたる永秀法師は、貧しいながら夜昼笛を吹いて暮らし続けた。これに対して、話末に「かやうならん心は、何につけてかは、深き罪も侍らん」という評語が付けられており、やはり数奇は仏道に通じるとされる。これは藤原俊成の『古来風体抄』等の和歌即仏道という中世に多い和歌観とも連動するものである。同巻六・九話・宝日上人、和歌を詠じて行とする事には、宝日上人なる者が、暁に「明けぬなり」云々の歌を、日中には「今日もまた」云々の歌を、暮れには「山里の」云々の歌を日々詠じて、勤行としていたという話を伝え、

和歌はよくことわりを極むる道なれば、これに寄せて心を澄まし、世の常なきを觀ぜんわざども、便りありぬべし。

と評している。和歌を詠むことによつて心を澄まし、これによつて世の無常を觀ずるわざともなつて、和歌は仏道に

通じることになる。こうして『発心集』では管絃と和歌その他の風雅の道、即ち数奇が心を澄ます手立てとなつて、仏道に連なることが説かれる。

西行仮託の説話集『撰集抄』卷三・一話・見仏上人岩屋に籠る事に、西行が仲間の僧とともに能登国いなやつ郡に至り、人里から離れ、海山の景色の勝れたところにある岩屋で、陸奥の松島の見仏上人に出会つた。上人は松島とこの地を月に往復しているということであつた。

此松嶋の有様も、ゆゆしく閑かにして、心も澄みぬべきを、ふり捨てて、多くの海山をへだて、はるく能登の境までいまそかりて、松風に就けていとゞ思ひをまし、よりくる浪にすめる心を洗ひ給ひけん程、いとゞいさぎよく覚え侍る。<sup>(12)</sup>

上人が景勝の地を求めて修行をしていることは、心澄むことを求めてのことと解されており、松島でさえそれが実現するであろうに、さらに能登にその地を求めたことに、著者は感動しているのである。これも仏道修行の一方法とすることになる。

説話集から離れるが、説話と関わりの深い『徒然草』六十段の例をみる。ここでは真乗院の盛親僧都が芋頭というものばかり好み、談義の最中も食していたことを記している。さらにこの上人は普段食べたい時に食べ、眠い時に寝ていたという。

ねぶたければ昼もかけこもりて、いかなる大事あれども、人の言ふ事聞き入れず、目覚めぬれば幾夜も寝ねず、心を澄ましてうそぶきありきなど、尋常ならぬさまなれども、人に厭はれず、よろづ許されけり。<sup>(13)</sup>

ここでは盛親僧都が身体の要求のままに行動し、心を澄まして詩歌を吟じていたというもので、心澄ます対象のより具体例が知られる。これも「心澄ます」即「数奇」の一例ということになるであろう。

## 四 「心澄む」と管絃

管絃は先に見たとおり、数奇の対象として代表的なものであるが、これと「心澄む」の関係は、楽人においてはより複雑なものがある。伝大神惟季の笛の書『懷竹抄』（惟季の後人の作で、十二世紀か）においては、

管絃ハ狂言戲事ナレドモ。法成熟之曲。見仏聞法ノ調ナル故。皆依<sup>二</sup>前世ノ宿縁<sup>一</sup>。又為<sup>二</sup>仏神之御計<sup>一</sup>。極道也。  
 …其<sup>レ</sup>上亦余所ニハ物グルワシト人ノ云計可<sup>レ</sup>好也。花ノ春。月ノ秋。木陰ノ納涼。雪ノ朝。鳥ノ囀。虫ノ音。風ノ音。浪ノ音ニ付テモ。取<sup>レ</sup>笛吹<sup>レ</sup>笛。心ヲトメテスキアカスベキ也。<sup>①</sup>

とあるが、管絃の調べは仏道に通うこと、自然の風物を目にし、耳にするにつけて笛を吹き、数奇あかすべきであるとしている。ここには「心澄む」はないが、これまでの和歌等の風雅観と同種のもがあり、さらには我を忘れて管絃に集中するという『発心集』の説話に似ている説も見える。さらには管絃は神仏に対する法楽の意味があることの深い認識があるのであろう。錦氏も管絃に神仏が感応することを論じている。そしてこのような自然の風物にふれて感興を催し、数奇に向かうということには、草木国土成仏の天台本覚論の影響があるように思われる。大神惟季の養子である大神基政の笛の書『竜鳴抄』巻下（長承二年＝一一三三）では、

月のあかからん夜。よもすがらあそびてははらだゝしからんこともわすれて。極楽浄土の鳥の声も。風の音もいけのなみも。とりのさえずりも。これかやうにこそはめでたからめ。とくくまいりてこれをきかばやと思べし。かやうならば。くどくはうともつみにはなるべからず。<sup>②</sup>

とある。一晚中管絃を催し、自然の風物に触れては極楽を思う。管絃は仏道へと連なり、罪には当たらぬものであるという。この管絃による罪の意識は、文学における狂言綺語観とも異なる。これは後に見るように音楽の専門家の競争によるものである。『竜鳴抄』ではこれに続いて、

又是をあなたがちにかくして。ひとにはわろうせさせて。こゝろのうちにはいひそしりわらひて。われひとりには人にすぐれん。さてよにいみじきものにいはれて。これをせうとくとくにせんと思はゞ。などか罪もなからん。

とあつて、これが彼等の仲間社会の実態であり、それは世捨て人的な永秀法師の数奇とは異なる、貴族社会では身分の低い者同士の競争心、出世欲なのであろう。『竜鳴抄』ではこれより後の箇所にも、

管絃につみなしといふ心は。すいたるものすべき事なり。すきものは慈悲あり。つねにももの哀なる也。あけくれ心をすまし。とこしなひに法会誦經にまじる。ほとけの三十二相をほめたてまつるに。音楽を具し。讚歎歌詠し奉るに。五音のしらべをそへたてまつる。花供に奏樂をし。散花に呂律をしらぶ。かやうなればぢごくなしといふなり。

とある。ここでも管絃は数奇に通じ、数奇は慈悲の心に連なる。そして心を澄まして法会に臨み、音楽を奏することによつて楽人は仏と結縁し、地獄に墮することはないのだとしている。ここにおける「心澄む」は、法会に臨む心掛けを言っているようである。楽人がつねに地獄を意識していたらしいことが知られ、その暗い一面がうかがわれる。実際に楽人同士のトラブルはいくつか知られている。有名なものでは、『今鏡』第七・新枕、『古事談』第六・二十六話等に見えるように、堀河天皇の時代、舞人多資忠が傍輩山村政連（正連などとも）に殺害され、一時神楽秘曲・胡飲酒・採桑老が途絶えたことがあった。また『楽所補任』保延四年（一一三八）の左近衛府生是行（南都方大神氏）の項に、行方が春日若宮の祭で行時に切りつけられ、その後歩行困難となつて出仕を止められた。行時もまたこの事件のために出仕を止められたとある。さらに『教訓抄』卷四には、建永元年（一一〇六）多忠成が兄景成の子に殺害され、再び胡飲酒が途絶えたことが記されている。能「富士太鼓」「梅枝」は、楽人間の殺人がテーマとなつている。楽書は曲目ごとの演奏の仕方などを説くことが多いが、『懷竹抄』『竜鳴抄』のような仏教的管絃観は、狛近真の『教

訓抄』(天福元年＝一二三四)に受け継がれている。

但、狂言綺語ノタワブレナリトイヘドモ、如レ此仏神三宝ヲモ納受セシメ、鬼神ヲモタヒラグル事、余道ニス  
 グレタリ。狂言ノアソビ、発心求道ノタヨリトナル。：如レ此、名聞ノ心 ハナル、事ナケレバ、神事仏事ニシ  
 タガヒテモ、マツ名利ヲノミ思、人ノ上ヲソシル。凡夫ノ習ヒ、当道ニカギラズ。タカキモイヤシキモ、此心ヲ  
 ラモワザルハナケレドモ、是ハクチヲシキ事ニテ待ナリ。<sup>(16)</sup>(巻七)

ここでは数奇や心澄むの語は見えず、舞樂を狂言綺語としてとらえ、神仏に手向けるものであること等によって、舞樂は発心求道の便りとなるのだとし、しかし名声や利益にとらわれるために、心迷うことがあることも記している。近真は種々の樂書を参照したのであるが、他の分野(余道)を意識し、その上で舞樂の道(当道)を考えるのが特色となっている。これは永正八年(一五一一)頃に成立した豊原統秋の『体源鈔』においてさらに拡大される。以上のように樂人達においては、現実的な利益にとらわれることが多く、純粹に数奇の思想を發達させることは困難であるようである。

## 五 「心澄む」と謡曲

さて謡曲において、「心澄む」「心澄ます」の用例を世阿弥の作から見てみる。「養老」では、前シテの老人が登場し、(シテ) 老いを養ふ滝川の、水や心を清むらん。

と謡うあたり、そして後シテの山神が登場したあとの謡に、

(地) 拍子を揃へて、音樂の響き、滾つ心を、澄ましつつ、諸天來御の、影向かな。<sup>(17)</sup>

あたりが注目される。ここでは滝川の清らかな流れに心を澄ましており、また音樂の聞こえる中、神々が影向するさ

まに心を澄ますとしている。世阿弥が水に特別な関心を寄せていることは、松岡心平氏の指摘がある<sup>18)</sup>。

次に「井筒」では、前シテの里の女が登場して、

(シテ) 暁あけごとの関伽の水、暁あけごとの関伽の水、月も心や澄すますらん<sup>19)</sup>。

と謡う。水に月は清らかに澄み、シテ自身の心も澄むという意味と解されているが、水に映る月をイメージしているのであろうか。そのあとのワキの旅の僧は、

(ワキ・詞) われこの寺に休らひ心を澄すます折節、いとなまめける女性庭の板井を掬くび上げ花水とし、…

と述べる。月とともに水もまた心澄すませるものであろう<sup>20)</sup>。そして月と水によって、清浄な世界が構成されるてゆく。僧にとつては、そうした風物だけではなく、古寺に居ることも心を澄すますもとである。こうしてこの在原寺が聖なる空間であることが示される。

「姨捨」では、後場においてシテの老女の幽霊の出を待つワキの都の男の謡に、

(ワキ) …心も澄すみて夜もすがら、三五夜中の新月の色<sup>21)</sup>、

とある。これも信濃国更科の姨捨山にかかる月に心を澄すます例である。

こうした水・月・宗教的な場による心澄すむは、金春禅竹の能にも受け継がれる。「芭蕉」では、唐土楚の国に山居する僧(ワキ)に、月の夜、近くの女(前シテ)が訪れる。僧の法華経読誦に女は女人・草木の成仏を喜ぶ。そうした仏道聴聞の中で、僧と女は心を合わせてゆき、

(シテ・ワキ) 仏事をなすや寺井の底の、心も澄すめる折せからに<sup>22)</sup>、

と謡う。仏事が進行して二人は心を澄すませてゆくが、それは寺井の底にある水のイメージと重なるものである。次に禅竹作かとされる「賀茂」であるが、播磨の室の明神の神職が京都の賀茂神社に参詣すると、そこに里の女二人(シ

テ・ツレ)が登場する。シテは手桶を持ってゐる。

(シテ・ツレ) 御手洗や、清きころろにすむ水の、賀茂のかはらに、いづるなり。

と二人の乙女は清らかな心をもつて、澄む水を汲むために河原に降り立つ。賀茂の明神に手向けるためである。ここでも二人の心澄むは、神域に近いためであり、そして流れる川水の清らかさがもととなっている。

(二人) 風も涼しき夕浪に、心も澄める水桶の、もち顔ならぬ身にしあれど、…<sup>(2)</sup>  
と謡は続き、水による登場人物の心澄むのモチーフが繰り返される。

実は謡曲において「心澄む」「心澄ます」の用例は数多い。これを以下に簡明に記すが、『謡曲二百五十番集』『謡曲二百五十番索引』(赤尾照文堂)を参考にする。

#### A 風景・風物に触発される

○水による…「養老」(たきつ心を澄ましつつ)、「井筒」(暁ごとの闕伽の水、月もころろや澄ますらん)、世阿弥「融」(心も澄める水の面に)、金春禅竹「芭蕉」(仏事をなすや寺井の底の、心も澄める折からに)、「賀茂」(清き心に澄む水の)、「仏原」(心の水の濁を澄まして)

○月による…「松風」(月に心は須磨の浦)、「井筒」(月もころろや澄ますらん)、世阿弥「姨捨」(心もすみて夜もすがら。三五夜中の新月の色)、金春禅竹「小督」(秋の空・名月)、「三井寺」(明月に向つて心を澄まいて)、

○その他…世阿弥改作「芦刈」(朝ぼらけ)、「知章」(野山の風)、「項羽」(牡鹿なく夕方)

#### B 宗教的な場による

○寺院…井筒(在原寺)

○神社：世阿弥「蟻通」（蟻通明神）、金春禅鳳「生田敦盛」（賀茂神社）、「竜田」（竜田の明神）、「第六天」（伊勢神宮）

C その他の登場人物の行為、あたりの情景

世阿弥「高野物狂」（鳧鐘鈴の声）、世阿弥作か「須磨源氏」（磯枕）、金春禅竹「定家」（時雨の亭に住んだ定家の心）、観世信光「皇帝」（宮中のしずまり）、「野宮」（嵯峨の野宮）、「巴」（流水心無うして）、「天鼓」（鼓の声）、「源氏供養」（鐘の声）、「梅枝」（独居の生活）、「初雪」（法事）、「大会」（禅観の窓）、「現在七面」（読誦）

このように謡曲においては、世阿弥の能で「心澄む」がよく用いられ、これの影響があるためか後の謡曲にもよく見られる表現となっている。これは室町時代の人々の好みとも、また能がもともと宗教的な世界を志向して神聖な空間を求める傾向が強いからとも思われる。「芭蕉」の場合は仏事において「心澄む」としている面も強い。これの反対の表現としては、「心濁る」があり、観世元雅の謡曲「歌占」などに見える。

ところで能においてはこれまでの例では、心澄む神聖な空間は、水・月・寺社という場などによって構成されている。世阿弥の「姨捨」では、都方の男が名月に心澄ますうちに、捨てられた老女の霊が登場し、月の光のもとで舞を舞うが、月は西に傾くもので、阿弥陀の浄土を思わせるものであり、また月は阿弥陀如来の右の脇侍である勢至菩薩であることが語られ、姨捨山は浄土と化してゆく。「羽衣」の天女の舞にもこのテーマは見えている。天女の舞によつて、駿河の三保の松原には月宮殿の有様も現われる。こうした山や海辺の浄土化は、浄土の使者のようなシテの舞によつてもたらされるものである。もう人一つ「東北」の例をあげる。この能は作者不明であるが、東国方より出た僧（ワキ）が京都東北院で和泉式部の幽霊（シテ）に会い、和泉式部の故事や東北院のいわれを聴くというものである。



後シテのクセの舞の終末部には、

(地) … 澗底の松の風、一声の秋をもよほして、上求菩提の機を見せ、池水に映る月影は、下化衆生の相を得たり。<sup>(24)</sup>

とある。東北院は次第に仏教的な世界へと変貌してゆくのである。同じく和泉式部を主人公とする「誓願寺」(作者不明)では、一遍上人(ワキ)が誓願寺にやってきて御札を広める。そこへ女(前シテ)が現われ、上人に教えを受けて喜び、上人を礼拝して姿を消す。その後和泉式部の幽霊(後シテ)が現われるが、式部は歌舞の菩薩となっており、舞を舞ううちに誓願寺も浄土と化してゆく。これは『平家物語』の「心澄む」の用例のように、音楽が周辺の環境を浄化する働きがあるのにも似ている。さらに言えば、『色葉和難集』によれば、和歌はこれを享受する人々の心を澄まさせるもので、人々の罪を滅するものであった。

(シテ) 常の燈火。影清く (地) さながらここぞ極楽世界に。生まれけるかとありがたさよ。…  
(地) … 真如の月の西方も。爰を去る事遠からず。唯心の浄土とは、此誓願寺を拜むなり。<sup>(25)</sup>

このように誓願寺は菩薩聖衆の来迎とともに西方極楽浄土の有様となつてゆくのである。「東北」誓願寺はもはや「心澄む」というよりは、莊嚴な仏教世界が展開する能で、特に後者は濃密な曼荼羅的な世界である。なお舞物の能ではないが、観世元雅の能「弱法師」でも、天王寺周辺の海山が成仏の姿であるとする。こうした特定の地の浄土化は、『梁塵秘抄』二五二番、

近江の湖は海ならず 天台薬師の池ぞかし 何ぞの海 常楽我浄の風吹けば 七宝蓮華の波ぞ立つ

とあり、琵琶湖は天台の仏教的な池であるという考えが見える。さらに『三国伝記』卷十・十二話・覚寛僧正「蒙」竹生嶋利生事に、

琵琶ハ則チ三摩耶形也。湖海其ノ像也。故ニ志賀ノ浦ノ松ノ嵐ハ索々トシテ石上ノ呂律ヲ調べ、筑「摩」江ノ急雨ハ嘈々トシテ流泉ノ雅音ヲ奏セリ。<sup>(26)</sup>

とあって、琵琶は三昧耶（『岩波仏教辞典』では、日本では平等・本誓・除障・驚覚の四義があるという）の形で、したがって琵琶湖全体が三昧耶の像である。そこで琵琶湖は松風が吹き、俄雨が降ることによって、自ずから琵琶の秘曲を奏しているとする。こうした思想は天台で展開していったのであろう。そしてこの例を含めて、「東北」「誓願寺」には草木国土悉皆成仏という天台的な思考の流れがあるように思われる。

また能の世界が自身の神聖化を求める傾向が強いことは、先述の楽人の思想の流れも推量できる。まず雅楽の理論が宇宙論的である。北山陰倫凉金撰の『管絃音義』（文治元年＝一一八五年）の冒頭には、

夫管絃者万物之祖也。籠二天地於糸竹之間<sup>(27)</sup>。和二陰陽於律呂之裏<sup>(28)</sup>。

とある。文机房隆円の琵琶の書『文机談』（文永年間＝一一六四～七五）には、卷一・孝時説比巴由来事にこのようにある（以下、菊亭本による）。

情事の心をうかゞへば、比巴はこれせかい建立の太本、山川虚空の儀理なり。半月隠月の顕密には昼夜陰陽の二の理をあらはし、甲乙円平の二儀には天地高下の不同をしめす。<sup>(29)</sup>

この琵琶をめぐる言説は先の『三国伝記』の琵琶湖の音楽と通じるものがある。そして『竜鳴抄』では鳥の声・風の音・池の波に極楽浄土を思うとしていた。また『教訓抄』巻七では、

凡ソ舞曲ノ源ヲタツヌルニ、仏世界「ヨリ」始テ、天上人中ニ、シカシナガラ妓楽雅楽ヲ奏デ、三宝ヲ供養シ奉テ、娯楽快樂スル業ナルベシ。

とし、雅楽を奏することは、この世に仏世界を現出することでもあった。そうした楽人の意識が「誓願寺」等の能に

流れているように思われる。『耕雲口伝』には、

万物の性は不生不滅なり。生滅にあづからざる性、万理を具足せり。此一性は天地にさきだちてあらずといふ時もなく、ところもなし。天地におくれてもまたしかなり。是万物の根源なり。和歌のことわりまた則これあり。：天地のうちにあるわざ、何事かこの歌の道をはなれたるや。：歌をば日本の陀羅尼(なり)と古人これを云へり。

とあって、和歌にも宇宙論的な見解は見られる。この書には妙音院相国に琵琶を習う話もあり、管絃と和歌の論は隣り合うこともあった。

なお『文机談』にも管絃と数奇の関係は言及されている。

又僧には院禪・長慶・覚暹などいふほうしすきものまでも、あふにあへる御世なりけり。(卷一・堀川院御時明伶事)

信義うたのかみ、三男至光、この人くなり。いづれもくいみじきすき人なりけり。(卷二・慈尊曲事)

この重通と申は大宮右大臣俊家のまご、あこまる大納言宗通ときこえ給し人のすゑの御こなり。御堂のとのちかき御すゑなりけり。この御ながれの殿原、みな管絃には好士にてをはします。いみじきすき人にてをはしましけり。(卷二・孝博門弟等事)

などである。音楽は和歌とはまた異なった、夢中になって心奪われる世界で、そこに数奇の精神が生まれ、「心澄む」状況が生じ、ここからも仏道に近づけるものでもあった。

以上、「心澄む」の諸相を見てきたが、「心澄む」と「心澄ます」とはどういう相違があるのかも当然問題となるが、これも今後の課題としたい。

注

- (1) 世阿弥学会編「総合芸術としての能」第一六号、平成二十七年八月
- (2) 以下、新編日本古典文学全集（小学館）による。
- (3) 「和歌の思想 詠吟を視座として」『院政期論集二』森話社、平成十三年
- (4) 歌論歌学集成第七卷（三弥井書店）による。
- (5) 新編日本古典文学全集『歌論集』（小学館）による。
- (6) 以下、築瀬一雄・武井和人著『十六夜日記・夜の鶴注釈』（和泉書院、昭和六十一年）による。
- (7) 日本歌学大系別巻二による。
- (8) 以下、日本歌学大系第五巻による。
- (9) 以下、新編日本古典文学全集（小学館）による。
- (10) 以下、新日本古典文学大系（岩波書店）による。
- (11) 以下、角川ソフィア文庫による。
- (12) 小島孝之・浅見和彦編『撰集抄』（桜楓社、昭和六十年）による。
- (13) 新編日本古典文学全集（小学館）による。
- (14) 群書類従第十九輯による。
- (15) 以下、群書類従第十九輯による。
- (16) 以下、日本思想大系『古代中世藝術論』（岩波書店）による。
- (17) 日本古典文学大系『謡曲集』（岩波書店）による。

- (18) 「水鏡」紀貫之と世阿弥——「国語通信」三二四号、平成二年四月。『宴の身体』（岩波書店）所収。
- (19) 以下、日本古典文学大系による。
- (20) 新編日本古典文学全集『謡曲集』（小学館）の現代語訳による。
- (21) 『元和卯月本 謡曲百番（全）』（笠間書院）による。
- (22) 日本古典文学大系による。
- (23) 『元和卯月本 謡曲百番（全）』による。
- (24) 新編日本古典文学全集『謡曲集』（小学館）による。
- (25) 新日本古典文学大系『謡曲百番』（岩波書店）による。
- (26) 中世の文学（三弥井書店）による。
- (27) 注（14）に同じ。
- (28) 以下、岩佐美代子『校注 文机談』（笠間書院）による。